



兵庫県 明石遊技業組合  
「瀬戸内海を舞台にした環境美化及び  
ふれあい交流」事業



明石遊技業組合 組合長  
富山喜一さん

地元の環境資産を  
維持・活用することで  
人のつながりを生む

子どもたちと一緒に明石港の  
清掃活動と壁画制作

兵庫県の明石市といえば、瀬戸内海の美味なタイヤコが水揚げされる漁港として有名である。市民にとっては世間に誇ることでできるはずの港だが、近年は空き缶やペットボトル、家庭ごみなどの不法投棄が目立ち、さらには青少年のたまり場となっていることが問題視されていた。その問題の解決のために立ち上がったのが、地元の釣り仲間などが中心となって結成されたNPO法人「医療・環境サポート協会」であり、その趣旨に賛同した明石遊技業組合の有志も連携して活動に参加することになった。

まず、2005年から明石港西外港にある防波堤付近の清掃活動を開始。この清掃活動は現在も年数回、定期的に行われ、地元の子どもたちもボランティアとして積極的に参加している。さらに、翌06年からはゴミを捨てられないような環境づくりを目指し、清掃活動と並行して、防波堤に壁画を描く活動をスタートさせた。これまでに約300mにわたって防波堤に壁画を完成させたが、描かれているのは明石の海の魚介類、明石在住の彫画家・伊藤太一さんの原画をもとにした明石城、魚の棚商店街、天文科学館、姉妹都市である中国・無錫市の名所風景、さらに兵庫県と姉妹友好提携するブラジル・パラナ州の名所風景などである。

これまで壁画制作に携わったのは、地元の中学校や高等学校、神戸学院大学の美術学部の生徒や学生などで、さらに小学生や聴覚障害を持つ子どもたちなども参加した。「こうした活動を続けることで、壁画の周辺にゴミを捨てる人は少なくなったし、たまり場と化していたところも解消されました」と話すのは、明石遊技業組合の富山喜一組合長と池田克己事務局長。当初は不信感を持っていた地元の漁業関係の方々も、いまは活動に対して理解を示しているという。



防波堤の清掃活動に参加する組合員

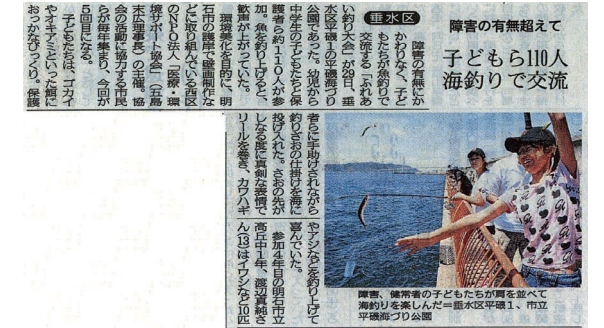


完成した壁画は約300mにわたって続いている

聴覚障害児と触れ合う  
地の利を生かした釣り大会

「当初は組合の有志が行う活動でしたが、2年前からは組合として地域に密着した貢献活動として取り組むようになりました。それによって傘下のホールの従業員やその家族が積極的に参加するようになり、またホールのオーナーさんも資金提供などでバックアップしてくれています」と、組合長の富山さん。さらに、その活動を発展させる形で、医療・環境サポート協会と協働して、聴覚障害児を招待してのふれあい釣り大会を隣接する神戸市垂水区の平磯海づり公園で実施している。5回目となった昨年の釣り大会には、聴覚障害児と健常児、およびその家族の計110名が参加。組合からも15名がボランティアとして参加した。また、釣りの指導や子どもたちの安全確保のために、関西を拠点とするセミプロ級の釣り師たちも応援に駆けつけた。

普段、どうしても野外での活動が少なくなりがちな障



「ふれあい釣り大会」を報道する神戸新聞



組合からも15名がボランティアとして参加した「ふれあい釣り大会」

害を持った子どもたちにとって、夏の日差しの下での海釣りは貴重な体験。カワハギやアジ、イワシなどを釣り上げ、歓声をあげて大喜ぶ姿が見られた。また、釣りの後にはバーベキュー大会を実施。障害児と健常児が仲よく触れ合う姿が印象深かったと、大会に参加した関係者が話していた。大会の様子は地元新聞に大きく報道されるなど反響を呼び、行政や福祉関係者からも高く評価され、継続開催の要望が寄せられている。また、釣り道具や賞品などの用意にあたっては、組合員ホールはもとより、地元の企業なども数多く協賛している。

「人間の心にはボランティア精神が自ずと備わっている。それを発揮できる場所さえあれば、みなさん、こぞって協力してくれます。今後も、その場所を提供できるよう組合をあげてがんばりたい」と、富山さん。地元の誇りである瀬戸内海の海の生活環境を守り、また、釣り場が豊富な地の利を生かした社会貢献活動として、今後も活動が楽しみである。